

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 2 日現在

機関番号：12201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25870319

研究課題名(和文)古代世界の復元を通じた「ラテン」の生成

研究課題名(英文)Representation of the "Latin" through the constructed ancient world

研究代表者

長谷川 詩織 (Hasegawa, Shiori)

宇都宮大学・基盤教育センター・特任助教

研究者番号：70634921

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、古代世界の復元を通じてどのような「ラテン」が生み出されたのか考察することにある。合衆国は第一次世界大戦を境にヨーロッパから自立した国家芸術の確立を目指す。本研究は、1915年に開催されたパナマ太平洋万国博覧会に注目する。本研究の調査対象となるのが以下の3点である。一つ目は、パナマ太平洋万国博覧会に出品された展示物、とくに彫刻、壁画、建築である。二つ目は1910年代の合衆国で流行した史劇映画である。三つ目は合衆国におけるメキシコの歴史や文化に関する研究の活発化である。同時に、合衆国の独自の文化を確立する過程で重要な役割を果たしていると考え、アフリカ探検の推進を視野に入れている。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study to consider what kind of "Latin" has been created through the construction of the ancient world. The United States has aimed to establish a national art that was independent of European art in the time of the First World War. Thus, this study especially focuses on the Panama-Pacific International Exposition of 1915.

The following three points would be research subjects. The first is visual culture, especially, sculpture, mural, architecture that has been exhibited at the Panama-Pacific International Exposition of 1915. The second is the historical drama imagined "Latin" that was popular in the United States of the 1910s. The third is the popularity of interests in Mexican history and culture among the intellectuals and artists in the United States. At the same time, this study has been including the promotion of natural exploration of Africa; because Africa is the important place to consider how U.S. culture has been constructed in the early twenties.

研究分野：アメリカ文化研究

キーワード：アメリカ映画 視覚文化 自然探検 博物学 家政学 ジェンダー パンアメリカ主義

1. 研究開始当初の背景

申請者は、日本学術振興会特別研究員として「パン・アメリカ主義再考 20世紀初頭の帝国主義文化とアメリカ/反アメリカの生成」と題する研究を進めてきた。

その過程で、20世紀初頭の合衆国では、国家のみならず地域主導で、マヤ・アステカの古代王朝を再現する野外劇が盛んに上演され、そのときメキシコにおける考古学調査の成果が応用されていたことを確認した。

その演劇スペクタクルは、1910年代に合衆国で流行したイタリア史劇映画『クオ・ヴァディス』(1913)や『カピリア』(1914)と共有されるものである。そして、その延長上にD・W・グリフィスの『アッシリアの遠征』(1913)や『イントランクス』(1916)、セシル・B・デミルの『十戒』(1923)がある。

古代世界の復元は、「ラテン」的なイメージを取り込みながらなされた、中南米の歴史を包括する国史編纂の別のあらわれである。

そこで申請者は、ヨーロッパの歴史や芸術的伝統からの脱却を試みるなか、中南米諸国の歴史や文化を巻き込みながら「原始」と「近代」とが混交したスペクタクルがどのように生成し、国家表象のパラダイム・シフトを促そうとしたのか、その矛盾や緊張も含めて論じていく必要があると確信するに至った。

2. 研究の目的

20世紀初頭の合衆国にとってラテンアメリカ諸国は、州とは異なる独立国家という意味で外国であるが、パン・アメリカという超国家的共同体のなかには編入されている。つまりラテンアメリカ諸国は、合衆国に帰属しているがその一部ではないという不安定な中間域に位置付けられた。

古代世界を復元する取り組みは、合衆国自身の自己像の揺らぎ 近代国家としての「アメリカ」とパン・アメリカの盟主としての「アメリカ」の懸隔 を反映している。このような問題意識のもと、パナマ太平洋万国博覧会、史劇映画の流行、考古学・人類学フィールドワークに関連する一次資料を横断的に調査、古代世界の復元と「ラテン」生成のプロセスを解明する。

3. 研究の方法

本研究は、1910年代の合衆国文化を論点に、古代世界の復元を通じた「ラテン」生成のプロセスを解明するにあたり、一次資料の収集・分析に重点を置いた歴史実証主義的手法を採用した。

調査結果を包括する枠組みとして、以下の3点を念頭に置いて分析を進めた。

パン・アメリカ主義：
中南米諸国を包括した「パン・アメリカ」像

を、国内外に発信することは、世界の覇権となりつつある合衆国の必須課題であった。そこで、パン・アメリカ主義に基づく文化戦略が、古代世界を復元する取り組みのなかで、いかに組み込まれたのかを確認した。

ルネサンス様式との比較：

パナマ太平洋万国博覧会を彩る建築物の課題の一つがルネサンス様式からの脱却である。同時代の知識人は、パピリオンについて言及する際、それがいかにルネサンス様式の建築の伝統から脱却しているのかを強調している。ルネサンス様式からの脱却を志向する芸術観が、「ラテン」生成にどのように関与しているのかを確認した。

優生学の影響：

1910年代は、優生学の大衆化が目論まれた時期であり、その影響は万博の展示や映画にもあらわれている。そこで、同じ時期に優生学的関心のもと作られた、「人類の世紀のホール」の彫刻や壁画に関する分析を併せて行い、言説の相補性について確認をした。

年度ごとの研究方法は以下の通りである。

平成25年度：年度の初めに、これまで申請者が収集した関連資料を再確認したうえで、その補足調査を米国議会図書館にて実施した。主に1910年代の映画業界誌、演劇業界誌、及び、パナマ太平洋万国博覧会関連記事の収集・分析を行った。

平成26年度：平成25年度の成果を踏まえて、国内アーカイブス等で不足資料を補足しながら、研究成果の公開と論文執筆と両方に集中した。

平成27年度：平成26年度中に所属大学の異動があり、論文執筆を引き続き実施した。平成26年度の実施予定分を着実に遂行することができた。

4. 研究成果

パナマ太平洋万国博覧会の展示物、合衆国で上映された史劇映画、メキシコをフィールドとする学術調査(人類学・考古学)の3点を集中的に調査することで、1910年代の合衆国の文化と政治の絡み合いを明らかにした。

パナマ太平洋万国博覧会の展示物：万博を構成した彫刻、壁画、建築の分析を実施する。スペイン・ポルトガルの影響を受けた中南米の文化要素、アメリカ先住民の伝統 儀式、文様、住居などが、ルネサンス様式の影響を受けた高尚芸術のなかで、どのように組み込まれたのかを論じた。

合衆国で上映された史劇映画：1910年代初頭の合衆国で人気を博した史劇映画を題材に、古代世界の復元方法(演出・演技、舞台装置等)の調査・分析を行った。古代を復元する試みについて、同時代の映画批評・演劇批評でどのように言及されたのか、観客はそこから何を見出したのか、The Moving Picture World, The New York Dramatic Mirror, 及び Griffith Papers 所蔵の脚本、手紙、メモの収集・分析を通じて明らかにした。

南米諸国をフィールドとする学術調査(人類学・考古学)：中南米諸国の歴史的背景に根差すローカリティの影響を解明するため、Bulletin of Pan American Unionにおけるメキシコ関連情報を中心に情報を整理・分析を進めた。ここで重要な問題となるのが、学問の大衆化である。そこで、中南米研究の拠点の一つであるアメリカ自然史博物館所蔵の資料を調査対象に含めた。

上記の研究を通じて、個別に機論される傾向があった万国博覧会、映画製作、人類学・考古学フィールドワークが、古代世界の復元という観点から包括できた。それにより、1910年代の合衆国の外交戦略を、文化的視座から補強しえたと考える。

加えて、合衆国の対外政策の延長上にある営為として、アフリカにおける自然探検を射程に入れて研究を進めたことは、本研究の大きな成果であった。アフリカとラテンアメリカの置換性および逸脱を、視覚文化および言説等を通じて示すことができた。

また、結果として、20年代のメキシコ・ブーム、30年代のディエゴ・リヴェラの壁画制作とニューディール文化政策、そして50年代の冷戦構造を象徴するリオ条約に、さらなる歴史的・文化的に文脈を付与したと思われる。

今日の中南米・カリブ海諸国では、反米感情の高まりが見られるのみならず、合衆国から政治的・経済的に自立する政策が立ち上げられている。

本研究は、このような反米意識の土壌を、20世紀初頭の合衆国の文化戦略から明らかにするに至った。それは最終的に、グローバル化の進展と共に複雑な国際情勢の最中にある今日の日本において、政治と文化の絡み合いと、そこに内在する緊張について、歴史的見地から問題提起することになると思われる。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

(雑誌論文)(計7件)

1. 長谷川詩織「勝利と敗北の狭間で バイオグラフ社作品における風景の発見と物語戦略」『比較文化研究』第118号、日本比較文化学会、181-195頁、2015年10月31日。(査読有)
 2. 長谷川詩織「アフリカにおける家庭づくり オサ・ジョンソンと1920年代の合衆国」『アメリカ研究』第49号、アメリカ学会、197-216頁、2015年3月25日(査読有)
 3. 長谷川詩織「種の起源をめぐる旅 ダーウィンの学説と『シンバ』(1928)の間テクトク性に関する試論」『比較文化研究』第113号、日本比較文化学会、177-190頁、2014年10月31日。(査読有)
 4. 長谷川詩織「Always Going Somewhere オサ・ジョンソンの戦後の楽園」『アメリカ文学評論』第23号、筑波大学アメリカ文学会、100-111頁、2014年3月31日。(査読無)
 5. 長谷川詩織「原始と近代の拮抗 南西部のプエブロ民族表象を中心に」『比較文化研究』第110号、日本比較文化学会、115-126頁、2014年2月28日。(査読有)
 6. 長谷川詩織「パナマ運河がつくる「ラテン」の輪郭 ジョン・バレットとパンアメリカン・ユニオンの言説を事例に」『比較文化研究』第108号、日本比較文化学会、93-104頁、2013年10月31日。(査読有)
 7. 長谷川詩織「ものをつくる行為を通じた知識と経験の統合 フランク・ノリスの時代からの考察」『比較文化研究』第110号、日本比較文化学会、191-200頁、2013年1月31日。(査読有)
- (学会発表)(計3件)
1. 長谷川詩織「越境する Homemaker ニューヨーク、アフリカ、1920年代」日本比較文化学会関東支部第38回例会、高崎経済大学、2014年9月13日。
 2. 長谷川詩織「At Home in Africa オサ・ジョンソンとアフリカにおける家庭づくり」第48回アメリカ学会年次大会、沖縄コンベンションセンター、2014年6月7日。

3. 長谷川詩織「情熱から責務へ 映画『アッシリアの遠征』におけるユダヤ民族表象とその寓意」日本比較文化学会関東支部第36回例会,東京未来大学,2013年12月14日.

〔図書〕(計0件)

該当なし

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等 該当なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長谷川 詩織 (HASEGAWA, Shiori)
宇都宮大学基盤教育センター 特任助教
研究者番号: 70634921

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: